

---

# ブラジル・シンドローム

ますたあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブラジル・シンドローム

### 【NZコード】

N6697J

### 【作者名】

ますたあ

### 【あらすじ】

あの日からあたしの人生が変わった。

失ったものは戻って来ないと分かってる。

分かってるけど……。

分かってるけど……。

でも……やつぱり、あたしキョンのこと……。

ハルヒに起こった悲しい別れ、時間と共にハルヒは……。

## 1話 別れ（前書き）

このお話は、09年5月22日～6月1日でmixiの田舎にて掲載し、涼宮ハルヒのGIRL'S PAGEにて2009年07月22日～2009年08月08日で投稿したものです。  
すぐにお読みになりたい方は、そちらをお読み下さい。^^  
では、どうぞ。^-^

あたしは窓から差し込んでいた朝日によつて目を覚ました。  
のつそりと体を起こし思いつきり伸びをした。

予定より早く目が覚めている。

あの日からあたしはいつも浅い眠りで、ちょっとした音や光で目  
が覚めるようになつた。

そう……体が……あたしが……深い眠りを受け付けなくなつたの  
。

よく分からなかつた。

SOS団の活動があたしにとつて全てになりつつあつた。

でも、それはいつも隣にあんたがいてくれたからと気づいたのは  
そう時間はかからなかつた。

あたしにとつてあんたはあたしに面白ことを持つて来てくれる  
サンタさんみたいなもんね。

でも……それがあたしにとつて防御壁だつたなんて気づいたのは  
あんたを失つてからだつた。

みくるちゃんや有希に田がいくあんたがなぜだか分からぬいけど  
イラついた。

こう、胸の奥から亀裂がはいるようにね。

それが何なのかもあたしはあえて気づかないフリをしていた。

あんたには恋愛は精神病の一種よ。なんて言ってたからね。

そう言つた手前、あんたに気持ちなんて伝える訳ない。

あたしは団長であなたは平団員。

恋愛関係になるなんてありえないことよ。  
そんないくつも連なった防護壁は結果的にあたしの苦しみを狭め  
るものにしかならなかつた。

そして、あたしは変な夢をみた。

以前にも同じ夢をみたことがあつたけど、今回も同じ。  
気がついたら制服で学校にいて、隣にあんたが寝ていた。  
その時、あたしは以前感じた恐怖に襲われながら、心のどかかで  
安心をしていた。

抜け出したい。

また、あんたはあたしのことを見てくれなくなる。

あたしは……

あたしは……

そんな素直の気持ちも出せなかつた。  
プライドなんてなくなつてしまえばいいのに。

戻りたくない！

じゅせ、これは夢なんだから

あたしの好きにさせてよー！

戻りたがるあんたをあたしは罵倒した。

そう、あんたはあたしのこと何とも思つてないのね……。

ならいい……

あんたなんか……

あんたなんか……！

いなくなればいいのよーーー！

⋮⋮⋮

気がついたら、あたしはベッドにいた。

やつぱつ、夢か。

夢でもあんたにあんなことやつてみたいことをためらつた。

でも、行かないとい。

あの日以上にあたしは今日ぜひ学校を休みたいく思つたことはなかつた。

しかし、あたしは今日登校しても問題はなかつた。

だつて、あんたは休みだつたんだから。

そして  
…

あんたが亡くなつたことをあたしは古泉くんから聞くといひになつた。

## 2話 現実

ウソ……

てつきり、古泉君が最近退屈しているあたしのために用意してくれたドッキリだと思っていた。

でも、その表情からはいつもの笑顔はなかつた。

『信じられないのは分かります。しかし、昨日彼は突然発作を起こし、僕の知り合いで病院に担ぎ込まれて來たのです。』

ウソ……昨日、元気だったじやない……

『あまりの突然なことに僕も涼宮さんと連絡することを忘れていました。申し訳ありません……』

それに……

『そして、先ほど医師から彼が息を引き取つたとの連絡がありました。』

あたし……

『僕のみならず、『家族の方しか彼とは面会はされていない』ようです。』

アタシ……

『薄れいく意識なのに、彼は……涼宮さんのことを見られて……いたよ……で……す……』

イヤだ……

あたしはその場に倒れこんだ。

幸い古泉君が支えてくれて何とかケガをせずに済んだらしいけど、あたしにとつてそんなことどうでもよかつた。

キヨンが死んだ……？

ウソ……？

そんな質問をあたしは自分で何度もした。

きっと、この場に来ていなかつたらその質問の答えは永遠に出なかつたと思つ。

みくるちゃんは今すぐに泣いてしまいそうだけど、泣いちゃダメって言い聞かせているのか我慢している。

みくるちゃんにこんな顔させて、あんた良いと思つてるの？

有希もいつも大人しいけど、この日はもっと大人しかった。

それに、何て言つか悲しそう……

そつか、あんたつて有希のこと分かつてたもんね。。

古泉君もあれから動けないあたしゃー」家族の方に代わって色々としてくれたみたい。

顔から疲れが滲み出ているけど、

『僕に出来る……最後の……役目……ですから……』

と言つて、目に涙を浮かべていた。

あんた、良い友人持つたじやない……。

『ハルにゃん……』

妹ちゃんの寂しそうな顔。

そんな顔しないで、大丈夫、大丈夫だから……。

あんたも妹ちゃんにこんな顔させて、良いと思つてゐるのー…?

『あなたが涼宮さんね、お話は息子から聞いております  
あんたはどんな話をお母さんにしたの?  
とつちめでやらなー……と、

『皆さんに送つてもらえて……あいつも幸せだと思います  
初めてお父さんにお会いした。』

あんたつてお父さん似なのね……小さい頃の写真今度……今度……。

棺に入っているあんたを見て、あたしは確信した。  
「キヨ、キヨン……」  
そこにいたのはいつも前の席で寝ているキヨンの寝顔そのものだ  
つた。

何よ……寝ているだけじゃない！

『す、涼宮さん……』

みくるちゃん、いいつ寝ているだけよ。  
任せてーあたしはいつも授業中に寝てこいつを隠してこ  
んだからー

『心肺停止、脳の活動も停止、一般的にこれを死亡」と言つ。信じられないのは……分かる』

何言つてゐるのみ。

せり、おれなにこよ！

今日、学校来なかつたから少しさは心配したんだから！！

『ハルちゃん……キヨンちゃん……キヨンくんは……妹ちゃん、いつもどうやってキヨンを起しているの？ほり、一緒にキヨンを起しちゃうつー』

『やめろー涼宮……』

『やめて下せーー！涼宮さん！彼はー！彼はもう死んでるんですーー！現実を……受けてとめて下さい……』

岡部と古泉くんにあたしは羽交い絞めされた。ちよ、ちよっとー離しなさいよーー！

このまま寝てたらキヨンが……キヨンが……。

分かつてた……でも、あんなにキヨンが幸せそうな顔で寝ているなんて……。

あんた退屈な日常に飽き飽きしてたんじゃないの？

自分だけ幸せな日常を送ってたなんて許せないわ。

あんたは……あんたは……あたしに面白いことを持つて来てくれるサンタさんじゃなかつたの……。

あたしがあんたの死を受け入れるようになったのは、前の席が空席になつた学校だつた。

この席であんたは窓に背をむけながら、あたしの話を聞いてたわね。

あんたがいなくなつたせいで授業中寝てたり、ボーッと空を見て

いたら教師に注意されるのよ。  
ホント、あんたつて……。

SOS団の活動は引き続き行っているわ。

あんたは名誉平団員1号として、永久に団員よ！

喜びなさい！！

みくるちゃんは新しいお茶を淹れてくれるみつになつたし、新しいコスも用意したんだから。

今度は有希も着るのよ。

見たいでしょ？

古泉君も新しいボードゲーム持つて来て、強くなつてるんだから！

だから……早く……戻つて来……な……そこよ……。

ねえ……戻つて来て……ねえ……つてば……。

そんないたしも大学生になつたわ。

大学なんて行きたくなかったけど、就職するのもイマイチ、ピンとこなかつた。

SOS団のみんなとはたまに連絡を取つてゐる。  
みくるちゃんは海外へ留学に行つて、時々メールでやりとりするわ。

有希も東京の大学へ進学したみたい。

古泉くんは大学は違うけど、会うことはなくなつた。  
あたしはと言つと……。

「なあ、聞いてるのか？」

「別れましょ」

「はあ、何言つてんだ……？おつ、おい……」

「あんた退屈」

寂しさを紛らわすため何人かと付き合つてみたけど、全然ダメ。  
どいつもこいつも、発情期の雄犬みたいにやることしか考えてない陳腐。

もう、口説き文句も決まつて逆に笑えちゃうわ。

いいの、自分が周りにどう思われよう。

こうしていれば、またその内……。

つて、あたしまだこんなこと考へてるんだろ？  
お墓参りだつて言つてゐるのに。

いつまでも泣いてぢやダメつて、そこで誓つたのに。

あんたが天国から戻つて来たくなるくらい、すうじい美人になつてやるんだから！

今のおたしを見て、あんたはどう思つのかしら？

また、呆れ顔見させてくれる？

あたしダメだよね？

こんなダメな女……あんたしかそばにいれくれないよ……。

今日、遊ぶのは実はあんたに一番よく似てるの。

あたしだって誰でも良いってことじゃないわ。

その……あんたに似たようなやつと付き合いしている。

でも、全然ダメ！

あんたも越せないよう男じゃまだまだね。

今回の相手もどうせそういうなんでしょうけどね。

そいつ出合ったのも、変な縁。

あたしが学校まで電車で通うんだけど、よくあいつのよ……痴漢。

その日も例のごとくいたわ。

分かる？知らないおつさんに足やらお尻を触られる女の子の気持ち？

あたしに触つたことを未来永劫後悔すると良いわ。

まさに駆着こいつとした来た時、あたしはそいつの腕を掴んでやうとした……。

『おい、何やつてるー！』

あたしの真後ろで聞こえたその声は電車内に響いた。

電車内がざわめく

『あんた、その子に触つてただろ？』

あたしは振り返る。

そこにいたのはいかにも真面目そうなサラリーマンに、髪をたくわえてメガネをかけて髪を立てた、あたしよりちょっと年上の男。

「し、知らない！何を言つてるんだ……！」

しらばっくれるサラリーマン

『俺は後ろで見てたんだ、とりあえず次の駅で降りてもらつか  
ふうん、最近は草食男子ばかりで、肉食ぶつた男もいるのに、ま  
だいたんだこんな男。』

『あんたも一緒に降りてくれよ』

痴漢を捕まえた男とここで初めて目があつた。

さつきは、突然のことによく覚えてなかつたけど、よく見ると…

…。  
あたしはもう、会えないあんたを重ねたわ。

似て……る……かも……雰囲気……よく分からぬ……。

あたしは彼に言われた通り次の駅で降りた。

結局、あたしの証言と他の人の証言で犯人はやはりこのサラリーマンだった。

ホント、こういう外見だけ真面目に見せて……世も末よね。

しばらく、話を聞きたいと拘束され、色々面倒なことに巻き込まれた。

『大丈夫か？』

やつと、解放され気分的に学校へ行く氣にもなれなかつたあたしはこのまま帰ろうとした。

そんな時、あの痴漢を捕まえてくれた男が声をかけてくれた。

「ええ、大丈夫、どうせ捕まえようと思つてたところだつたし」

『ははは、そうか。それは悪いことをしたな』

その笑い方が少し癪に触つて思わずムッとしてしまつた。

『これからは女性専用車両に乗れよ』

そう言つて彼は改札口に向かつた。

あたしはその潔さに驚いた。

こういうのつて、「ありがとうございます。もしよかつたらお礼  
がしたいので連絡先を教えて下さい」なんてやりとりがあるもの。

なのに、何でそんな当たり前のことしたみたいにいれるの？

「ねえ！」

あたしは思わず彼を呼び止めてしまった。

彼は振り返り、無言であたしに用件を促してきた。

「お礼……させてよ

『えつ？ いや、別に良い……』

本当ならそれでおしまいにしてよかつた。

でも、なぜか分からぬ。

彼とは以前、どこかで会った気がする。

そんな気持ちがどこから来るのか分からぬ。

だからあたしは知りたくなった。

どうせ、つまらない人生なら、この不思議を追っかけたくなった。

「今度の日曜日、あんた暇？」

あたしは彼の言葉なんか聞いていなかつた。

『えつ……？ 暇は暇だが……』

「じゃあ、日曜日10時、北口ね」

あたしは矢継ぎ早にそう告げると彼の横を通つて改札を出た。

改札の向こうであたしは固まつている彼にこう言った。

「来ないと、死刑だからっ！」

どうしてこの言葉が出たかは分からぬ。  
ふと、頭に過ぎつたから口にしただけ、  
彼の反応が見たかつたのかな？

あたしと同じように彼は笑ってくれた。

田を待ち遅じてゆきのまつづりかしら。

「あんな……キヨン。

リビングで朝食を済ませ、あたしは着替えた。

「日曜日なのに早いね」とお母さんに言われ、あたしが「テートだから」と答えると、お母さんは渋い顔になつていた。

別にあたしだつてしたくない。

何なら今回が最後にしたつて良い。

どうせ、あたしを退屈にさせなこのつてあんたしかいない。

そう、あたしは確信を持ちたいの。

それだけのためにあたしは遊ぶの。

だからやきもち妬いちゃダメよ？

あたしは『真立てに』つてこるあんたに声をかけた。

（古泉君…『写真撮つて…』）

（ちよつと、待て！お前……）

あんたにお姫様だつこをしてもらつた写真。

嫌なそうな顔をしてこるあんたとは対照的なあたしの笑顔。

この頃のあたしと今のあたし変わつた？

少しほはキレイになつたかしら？

あんたはそういうこと平氣で言つからいつも驚かされたわ。

それにも、この嫌そうな顔。

ホント、どうしてあんたなんかに惚れたのかしら？

まあ……そんなあんたが今も一番のままなのが理由なのね。

じゃあ、いつてくるわ。

あたしは『真立てを机に置くと部屋を出た。

待ち合わせ場所には、すでに彼がいた。

グレーのジャケットにドクロのシルバーリング、髪型も少し変えて来てるわね。

ふうん、気合も入れてきたみたいね。

彼があたしを見つけるなり手をやんわりとこちらに向けてあげていた。

あたしは別に急ぐこともなく彼の方へ歩いた。

まあ、あんたとは違つて早く来るのは関心だわ。

『よつ』

「来たのね。てっきり来ないかと思ったわ」

あたしは遠慮せずに心の中の思いを言った。

別に取り繕う気はない。

嫌いな嫌いになればいい。

あたしは男の前で媚びへつらつたりする気はない。

猫？被るわけないでしょ。

『まあ、お礼をしてくれるんだからな』

……やつぱり、変ね。

あたしの言つたことにムッとすることもなく、少し呆れた顔をしながらもどこか嬉しそうな顔。

余裕すら覗える

「そうね、あたしより遅かつたらその約束も無下にしようと思つたところよ」

『そうかい。ところで……』

そう言つと彼はあたしの前髪を触つた。

『髪切つたせいかこないだ会つたときより幼くなつたなえつ……気づいたの……？

あたしは思い切つて前髪を切つてみた。

気づいて欲しかつたと言つより気づくかなといつ気持ちの方が強かつた。

見事、彼はそれに気づいた。

「幼くなつてないわよ！」

あたしは勢い良く彼の手を振り落つた。

『そつかい。でも、俺はこないだ会つた時よりも今の方が好きだ。  
お前らしこよ』

そう言つて、また余裕の笑みを見せた。

ムカつく……あたしはキレイになりたいの。

だから、今日のピンクのスカートにお花の髪飾りなんか……。

『似合つてるぞ、俺はかわいい方が好きだ』

「なつ……」

いきなりの言葉にあたしは言葉を詰まらせた。

「あんたの好みなんか聞いてないわよ……」

あたしは自分の気持ちを押し殺した。

嬉しい……こんなこと思つたのいつぶりだろ……。  
この気持ち……。

でも、ダメ……聞えない……。

言わない……。

だつて……

だつて……あたしには……

キヨン.....

『おい、大丈夫か？』

彼はわたしの肩をゆすつていた。

「平気よ」

あたしはまた気持ちを殺した。

言う必要……ないもん。

『そつか……で、どんなお礼をしてくれるんだ？』

何でそんな自分のことのようにホッとするの？  
何よ……まますます重ねてしまひじゃない……。

## 4話 テート（後書き）

キヨンとハルヒの『真はmixiへの投稿時はヒョしました。しかし、こちらでは載せないのでイメージを頑張つてして下さい（笑）

データっていつもは相手が勝手に決めたところに行くんだけど今はあたしが行きたいところに行くことになった。

そうなるかなと思って予め考えて來てた。

あたしがよく行つてた喫茶店に入った。

ここに來るのも久しぶりね。

入るなり中を見渡すと見知った顔がいた。

「いらっしゃいませ、お久しぶりですね」

いつもの席に着くとすぐにお冷とおしぼりを持って來てくれたのは喜縁さんだつた。

「そうね、卒業して以來來てないもんね」

あたしは喜縁さんに疑問を投げかけてみた。

「まだ、誰かここに来る？」

それに対しての返答は、

「私もつい最近またお手伝いをし始めましたので、その間は誰も」

そう、古泉君も忙しいのね。

「あたしアップルティー。あんたは？」

『ホットコーヒーで』

あたしたちの注文を伝票に記した喜縁さんはマスターに注文を言つていた。

「あんた、メニュー見なくてよかつたの？」

『ああ……まあ喫茶店にきたらいつもホットコーヒーだからな』

ふうん、そう。

そういえば、あんたもホットコーヒーよく飲んでたわね。

あの時、あんたがした話覚えてるわよ。

有希が宇宙人でみくるちゃんが未来人、古泉君が超能力者だつたわね。

何を話すかと思つたら、そんな話  
あんたはもう少しまともだと思つてんだけど、とんだ茶番だつた  
わ。

でも、不思議と悪くないと思つた。

そうあつたら、面白いとさえ思つたわ。

じゃあ、あんたは異世界人？なんてことも考えたわ。

そつちから戻つてきたら異世界人に認定してあげるわ！

そんなことを考えていると注文の品を喜緑さんが運んで來た。  
結局、あたしたちは注文をしてから一言もやりとりをしていなか  
つた。

何よ、楽しくないって言うの？

あたしは砂糖とミルクを入れている彼を一瞥しながらアップルテ  
イーを飲んだ。

ほのかなリングの香りと甘さが不思議と体をリラックスさせてく  
れた。

『それで？』

飲む前の作業を終えた彼は飲んだ後にあたしに聞いてきた。

『今日のお礼はこここの代金か？』

「まさか、ここは割り勘よ」

嫌な顔を期待したけど、彼はまたあたしの期待を裏切つた。

『どうか、よかつた』

『何よ？』

あたしはつまらない気持ちを声に乗せて投げ返した。

『いや、こここの奢りだけなら残念だと思つてな』

『痴漢を捕まえたのが？』

『そうだ』と言つて、口元にやんわりとした笑みを作ると、

『どうせなら、もう少し一緒にいたいと思つてな』

その笑みはあたしの心を揺さぶつた。

どうしようつ……今、あたしどんな顔をしているんだが……。

あたしはふんと鼻を鳴らし、視線をそらしてアップルティーに口をつけた。

さつき飲んだときより甘く感じたのはどうしてだろう?  
あたしは目だけ彼に向けると、彼の口元はにやりと意地悪な笑みになっていた。

『まあ、お前のお尻もこのコーヒーだけじゃ釣り合わないだろ?』  
「なつ……あ、当たり前でしょ!…?誰の触つたと思つてるの!…!」  
あたしは今にも立ち上がりやうな勢いで怒つた。

と言つより恥ずかしかつた。

彼は『やうだな』と笑うとコーヒーに口をつけていた。  
ムカつく……でも、久しぶりにこんなに叫んだ気がする。  
気がつけばあたしはいつもあたし……あの頃のあたしに戻つた気がした。

SOS団の部室でいつも繰り広げたあんたのやりとり。

最後には必ず一緒にいたあんた。

そんなんあんたにあたしは遠慮なんかしなかつた。  
する必要がなかつたの。

だつて、全部あんたは受け入れてくれた。

悔しいけど、あんたのモテる理由が分かる気がしたわ。

知つてる?あんた人気あつたのよ?

まあ、『あたしという彼女』がいたからみんな声を掛けなかつたらしいけどね。

彼女か。。

あんたはどう思つてたの?  
結局、そのところ聞いてないわね。  
でも、もう聞けないか。  
……つて、あたしまたあんたのこと……。

「ねえ…」

あたしは彼にあんたにいつか聞いてみたかった質問をした。

「あんた。宇宙人、いると思う?」

急に何を聞き出すのかと思つたのか彼は、飲もうとして手に掛けた「コーヒーカップを持ったまま固まつていた。

「宇宙人よ。いると思う？」

あたしはもう一度問い合わせて見た。

この質問をすると答えは2つに分かれるが、本当の答えは一つしかない。

何言つてるんだこいつは？本氣でいると思つてているのか？

こんな考えが腹にある間はどっちでも答えは一緒。

中には真剣あたしに病院へ行くことを勧めてきたやつもいるわね。

『そうだな……』

彼は「コーヒーカップに掛けていた手で自分のあごひげを触るとゆつくりと口を開いた。

『いるんじゃないか？』

どこか他人行儀な回答

「じゃあ、未来人は？」

『いてもおかしくないだろ？』

意外にもこの質問には表情は崩さなかつた。

別に理由を語ろうともしない。

まあ、聞きたくないし、

「超能力者なら？」

『それなら配り歩くほどいるだろ？』

ここまでならあたしは知つてゐるあいつと同じ考え。

あたしはあの七夕の日に学校に忍び込んで一緒に織姫と彦星に宛てたメッセージを書いてくれたジョン・スミスを思い出した。

あれが、きっかけで北高に入ったんだつたけ。

担任はやたらと上の私立を薦めて來たけど、あたしは面白いこと

をしたかった。

勉強は必要最低限のことよ。

どうしてあんたはそれも出来なかつたのか不思議だつたけど。  
それについて考察していれば、もう少し高校生活も楽しかつたかもね。

あたしはもう一つの質問を彼に投げかけた。

「異世界人は？」

彼は視線だけを上にあげ、じつちを見た時にずれたメガネをあげてこう言った。

『案外、近くにいるんじゃないのか？』

「ふうん」

あたしはいかにも興味がなさそうな返事をした。

しかし、実際は考え方をしていたから返事に氣を使う余裕がなかつただけだつた。

今までに返つて來たことがない答えた。

多くを語らない癖に、なぜかその言葉に納得させられる。

何か理由でもつけようなら「あんたの意見なんか誰も聞いてない」

つて言つて黙らせる予定だつたのに、

そういうところ、あんたとは違うわね。

その後も曜田によつて感じるイメージや数字など、まるであんたとの会話を思い出すように話をした

でも、彼が返す言葉はあんたに似ているところもあり、違つところもある。

しかし、あたしはあんたと同じものを彼に感じていた。

ダメ……違うの……あたし

彼はキヨンじゃない……

じゃあ、サヨンより上かつて？

分からぬ。

でも……もう少し……一緒にいても……いいと頼む。

そして……あたしは『彼』に『あんた』がもし生きていたらと重ねるよくなつていつた。

## 7話 本音（前書き）

ハルヒの心境を表現するために、変な改行を行つてます。

PCの方はまだ読めるかとは思いますが、携帯でご覧の方には申し訳ありません。

この話以降、この改行が多く出てくるかと思いますが、御辛抱の程、お願い致します。

あれから、あたしたちは付き合つてました。

人生初の告白をしたけど「付き合つてよ」と言つただけ。  
まあ、彼も『ああ』とこんな感じであつたり決ました。

もしかしたら、付き合つてないのかもね。

それでも、あたしにとつてそんな肩書きあつてもなくともいいのもよかつた。

もし……あんたがこれを見たらどんな顔をしてくれた?

怒つた?

悲しんだ?

それとも、何とも思わなかつた?

今、あたしあんたに言われたとおり健全な女の子らしく恋に励  
んでもるわよ?

ねえ、早くこなないと彼とキスしちゃつわよ~

いいの?今日帰つて来ないわよ?

止めるなら今の内だからね……。

キヨンの意氣地なし……。

あんたは何度話しかけても表情を変えないことはなかつた。

[写真元]元、あの時があたした。

こんなことになるなり……あの時……夢であんなこと叫ぶなあや  
よかつた……。

素直に好きって……離れたくなつて……叫べばよかつた……。

それで、バイバイした方がこいつはならなかつたよね……。

泣いたといつてあんたは帰つて来ない。

だから、強くならなきやつて思つた。

変わらなきやつて思つて、あんたはあたしから離れてくれないの?  
付合つたよ?

なの?.....えりして、あんたはあたしから離れてくれないの?

ねえ!....なんでしょう!?

出てきなさい!

あたしの声はむなしく部屋に響くだけで、あんたからの返事はなかつた。

キヨン.....あんた一体どうしたいの.....。

教えて.....あたし.....もう分かんないよ.....。

そんな時、彼から電話がかかってきた。

『どうした? 体調、悪いのか?』

そうだ.....今日彼とデートだつたんだ。

あたしは机に置いてある時計で時間を確認した。  
待ち合わせの時間を10分過ぎていた。

「ひめん.....今から行くわ」

何言つてるんだる?

ホントはそんな気分じやないのに....。

『大丈夫なのか? ムリしなくてもいいんだぞ?』

「ううん...会いたいから」

そんなことない.....今、会つたらあたし.....。

『ううか.....なら、待つてるから、氣をつけて来いよ』

「うん、ありがとう

今からでも遅くない。

ただ、体調が悪いからとか、

会いたくなこつていつもみたいに言えぱいこじやなー……。

なのこ、ビウして?

ビウして、彼には本当のひと言えないの?

違ひ……

ホントは……

ホントの氣持ちは……

彼に会いたい……  
キヨン

あたしは気持ちの整理もつかないまま家を飛び出した。

空はあたしの気持ちを表すように激んでいたことにはづくのは、  
自分の頬が濡れてからだった。

雨か……。

昨夜は、雨は降らないと言っていたけど、今日の天気予報は観ていない。

雲の動きが早くなつたのかな？

あたしはあることに気が付いた。

確か折り畳み傘が入つていたはず、カバンを探すとそれは入つていた。

あたしは自分の日頃の準備に感謝しつつ、差すことにした。

その時、あたしはあんたと一緒に帰つた時の風景を思い出した。あの時は2人で傘差して帰つたわね。

実はあの時も折り畳み傘はカバンに入つていた。

ホントは職員室から借りてきた傘をあんたに貸そつと思つた。

でも、あんたの気持ちよさそつな寝顔にあたしはあんな行動をとつてしまつていた

あの時、何しようと思つたか分かる？

教えないわよー

バカ！

もうすぐ彼との待ち合わせ場所に着く。

雨のおかげでゆっくり歩くことができ、気持ちも自然と落ち着いてきた。

おかげで心の整理がついた。

もしかして、あんたが雷様様にでも頼んでくれたの?  
まさか……古泉くんもあるまいし、  
あんたにそんな気の利いたこと出来ないよね。  
それとも……やきもち妬きすぎて泣いてるのかしら?

バカね……あんたが一番よ。

今でもね。

待ち合わせ場所にいた彼にあたしは驚いた。

「あんた……傘は?」

『ああ、忘れた。待ってる間にそういうの「ハンペー」で買おうと思つた  
んだけどな……』

彼はあたしの差し出したハンカチで服をぬぐいながら、

『ハルヒの声が寂しそうだつたから、来た時に俺がいなかつたら…  
つて思つたら動けなくてな』

恥ずかしそうに笑う彼にあたしは何だか申し訳ない気持ちになつた。

あたしのために、濡れても我慢して待つてくれたんだ。

『バカ! そんな気遣つて、風邪でも引いたらどうするの? そつちの  
方が迷惑よ』

そう言つとあたしは溜息をついた。

『ホラ、しょうがないから入れてあげるわ。その代わり持つてよね  
あたしは折り畳み傘を彼に差し出した。

そんなに大きくない傘。  
2人で入るなんて……。

『ありがとう』

そう言つて彼は笑つた。

その優しい笑顔は……キヨンよりもかっこいいと思つてしまつた。

キヨンが笑つた顔があたしは好きだつた。  
全てを包んでしまう様な笑みは思わずこっちが照れてしまつほど  
で、あたしはまことに見ることが出来なかつた。  
彼の笑みもそんな感じだつた。

あたしにはちょうど良いサイズの傘。

でも、2人で入るには狭い。

必然的に何度も傘を持つ彼の左手に右手が触れる。

ヤダ……あたし震えてる……。

『ん? どうした? 寒いのか?』

どうしよう……。

寒くないと言えばいいの?

じゃあ、何で震えてるか聞かれるかもしれない……。

それに対してもうどう答えばいいの?

手を伸ばせば、届く。

だつて、あたし達は付き合つてゐるんだし……。

#四ノ.....

「おそれれこ.....

おたしもつ薦めれなによ.....。

## 9話 フラジル・シンドローム

あたしの気持ちは砂時計みたいにひっくり返った。  
下へ流れる砂をもう誰も止めるとは出来ない。  
ついにあたしはあんたを……キヨンを思い出として下へ流すこと  
にした。

これが最後……あんたとの思い出を回憶させて欲しい。  
本当なら1日、1週間かかるなどを、あたしは彼と別れる駅ま  
でに終わらせることにした。  
だから、時間を止めたくなつた。

なぜかは分からぬ。

でも、そうしないと彼に悪いと思つた。

あんたが……早く来ないからよ……。

あたしだつて待つてるだけなんてイヤなんだから……

。

もうすぐ、あんたとの思い出が終わる……。

何度も見たあの夢……。

そつか……あんたはまだそこにいるのね……。

だから、あたしから抜け出せなかつたんだ……。

でも、もう……いいよ……。

キヨンも疲れたでしょ……。

ヤダ……泣きたく……。

いりえなくわや……彼が困っちゃう……。

ねえ、キヨン……。

どうして、迎えに来なかつたの……？

あたし……待つてたんだから……。

もしかして、待つてるだけじゃダメなの……。

なら……あたしはこれでいいの……？

このまま、キヨンの思いを下に向けたまま、

逆さまにすることもなく、  
ずっと、下へ下へ……。

それこそ、いつしか地球の裏側へ抜けるぐら、  
深い深いところへ、

キヨンを追いやつていいの？？

どうなの？涼宮ハルヒ……。

(ハルヒ？)

へつ？

(ハルヒ？)

キヨン？

(ハルヒ)

あたしはいいよー

キヨン...エリミ...るの...?

キヨン...!

『ハルヒー』

あたしはまたここに戻された。

隣には...キヨンじやなく彼がいた。

『大丈夫か?さつきから何度も呼んでたのに...やつぱり、今田はムリしてたんだな...』

違ひの...。

『「じめん...気づいてやれなくて...』

違ひ...やうじやなくて...あたし...

『今日はもう帰るわ。家まで送つて行くから』

「違ひの...」

ここ...あたしは再び砂時計をひっくり返した。

『ハルヒ……？』

あたしが当然叫んだからか、彼は驚いた顔をしていた。  
「ごめんなさい……あたし、やつぱりあんたとは付き合えない……  
もう、我慢することができない。」

「あたし……

キヨンのことが好きなの！」

そう言つてあたしはそのまま走り出した。

『おい！待て！ハルヒ！』

あたしは彼の呼び止める声も無視をして、雨の中走った。

気がついた！

キヨンがいない世界はやつぱり退屈だわ！

あの時と一緒に

どうしてこんな簡単なことに気付かなかつたのかしら！

キヨンがいないんだつたら……、

キヨンがないんだつたら……。

自分から向こうへいけばいいのよ！

あたしは今まで胸の奥で固まっていたものが一気に流れ出たような気がした。

あふれ出したエネルギーはもはやとつ止めもなく流れ出す。

阻るものすらを巻き込んでいく。

走る足取りも軽くなる。

グングンスピードが上がる。

もうあたしを阻むものは誰もいない！

待つてなさい！

団長を迎えて来ないなんて団體としてあるまじき行為なんだか

うー。

向こうでとつめでやるんだからーー！

駅のホームに着いた。

ちょうど、その時アナウンスが聞こえた。

……特急が来る。

ホームには電車を待つ人でいっぱいになっていた。

もう彼とも会えないのね。

そういうえば、名前も聞いてないわね。

悪いことしたかも、

このままあたしがいなくなつたら、  
彼はどうするんだろう?

怒る?

悲しむ?

それとも、何とも思わない?

あんたなら良い子見つかるわよ。

だって、あんたはキヨンよりも気が利いて、  
キヨンと同じくらい優しい。

ホントはもっともっと良いことがあるんだろう? うーんね。

あたしこいつてあんたは……。

最後の彼氏……

そして、あたしに面白いことを持つて来てくれた季節外れのサンタさん。

電車が来た……。

スピードは緩めることはない……。

あなたのところまで遠いと思つてたけど……、

もう田の前に……。

(ハルヒ……)

キヨン……やつと迎えに来たの……？

(ああ……悪かつたな)

言い訳はそつちで聞いてあげるわ。

だから、早く手を……繫ぎましょ。う。

あたしそつちに初めて行くんだから、案内しななことよ。

(分かってる…… わあ……)

あたしはキヨンに誘われるように人の波を搔き分け、点字プロックを越え……。

もひ、この世界ともバイバイしないと……。

キヨン……痛くないよ! 今すぐあたしを抱きしめて……。

そのまま、ホームへ飛び込んだ

電車が急ブレーキをかける音と甲高い悲鳴があたしがこの世界で  
最後に耳にした音だった。

## 11話 冷却

あれ……温かい……。

ホントにキヨンが抱きしめてくれてるの……？

キヨンのにおいもする……。

キヨン……来たわよ……。

「うちから来てやったわ……！」

驚いた？

あたしを誰だと思つてゐる？

SOの団団長涼宮ハルヒよー

これぐらい当然よー

わあ、いいわね！

まあは、「」を案内しなさい！

ほり、何につまでも抱きしめてるのよ~

そんなに会いたかったら、あんたから来たらよかつたのよ~

キヨン……

。

『ハルヒー。』

あたしは急に後ろから引っ張られる衝撃を感じた。

.....。

『お前……何やつてんだ！？』

あれ、ここは……？

あたしは目を開けた。

そこにはあたしが想像していたより割りと現実的な世界が広がっていた。

「キヨン……」

やつと、念えた……。

耳が徐々に周りの音を拾い出した……。

（大丈夫か！？）

（身投げ？まだあんなに若いのに……）

(あの子がどうにか捕まえてくれたからよかつたものの……)

えつ……？

「キヨン……ここつて……天国じゃないの……？」

あたしはまだ状況が理解出来ていなかつた。

キヨンは無言であたしを見つめたままポツリと呟いた。

『ここには、まだ天国じゃない』

えつ……？

じゃあ……あたし……。

『ああ、まだ生きてる』

あたしはすでに体に力が入らなかつた。

でも、もつとあたしは力を入れることが出来なかつた。

そつか……あたし……あんたのとこへ……行けなかつたんだ……。

この後、あたしは駅員が呼んでくれた救急車で病院へ搬送された。偶然か分からぬけど、そこはあんたが亡くなつた病院だつた。幸いどこにも異常はなく、少し様子を見るため入院することになつた。

お母さんは泣きながらあたしを叱つてくれた。

親父に殴られたのは本当何年ぶりかしら……。

親不孝の子どもで『めんなさい』……。

彼ははずつとそばにいてくれた。

彼は何も言わなかつた。

ただ、ずっとそばに……そばにいてくれた。

あたしはずつと窓ばかり眺めていた。

今のおたしを見てあんたはどう思つているんだろう?

きつと、怒つたんだろうな?

何で分かるのか？

だつて、彼は怒つていていたから……。

口に出せないけど分かるんだからしょうがないでしょ？

それより、何でもつと引っ張つてくれなかつたの？

おかげでそつちに行きそびれたじゃないのー。

アホキヨン！

「こんなにあんたのこと想つてこるんだから出でてきたひづりなのよ！」

その時、病室のドアをノックする音がした。

「この音は……彼ね。」

「じうべきー」

あたしはドアの方も見ることもなく返事をした。

「あんたも懲りずに毎日来るわね。もしかして、责任感じてるの？  
何度も言つけど別れたことが原因で飛び込んだ訳じゃないの。あた  
しは……」

「キヨンに会いたかったんだろ？」

「やう、だからもつ明日から来なくていいわよ」

「やうは行かない。せつかく会いに来てやつた甲斐がないからな

「しつこいわねーあんたの顔なんかみた……」

あたしは一の句を継げれなかつた。  
そこにいたのは、メガネをかけ、髪を生やしたいつもの彼じやな  
かつた……。

## 最終話 キヨン

「…………どうした？死んだ人が生き返ったような顔して？」

「ウソ…………だつて……。

「まさか、お前…………会えないからつて勝手に俺を殺したんじゃないだろうな？」

「あんた…………だつて棺に…………。

「ん？そんなとこまで話が進んでるか…………。やれやれ、古泉から連絡もうつて帰国してよかつたな」

あたしは思わず頬を抓つた。

痛い…………。

何度も瞬きしても変わらない。

間違いなく…………。

間違いないく……。

「キヨン……」

「そうだ、お前の目の前にいるのは間違いなく俺だ。生きているだ」  
キヨンはそう言つてあたしの手を握つた。

温かい……。

でも、懐かしい感じがしない……。

グレーのジャケットにドクロのシルバーリング……。

あの、服装。見覚えがある……。

「キヨン……いつ帰つて来たの？」

「ああ、そんなことまで忘れたのか。さつきも言つたとおり古泉から連絡があつてな……」

キヨンの話ではついたないだ帰つて来て、あたしはたちばなーテーント中にケンカをして、それであたしがホームへ飛び込もうとしたみたい。

それをキヨンが掴んで助けてくれた

。

そう……そうよね……。

あたし……キヨンがアメリカに行つてゐる間、寂しくてそんな考えに囚われていたみたいね。

「やれやれ、勝手に死なされたら困るな」

「ホント……」めん

やう言つと、キョンは穏やかな顔つきで優しく頭をポンポンと撫でてくれた。

違つよつな……でも、違わないわ。

服だつて、今日会つてゐからよ。

うん、そうだわ。

頭打つたのかしら？？

「心配をせずすまなかつた……お前がそんなに弱いなんて思わなかつたよ。これからはこまめに連絡する」

「ホント……？」

「ああ、ホントだ」

「ウソ付いたら……分かつてるんでしょ」

「何でもする」

あたしはキョンにあつとあらゆる要求を突きつた、キョンは苦笑いながら話を聞いてくれた。

「ヒカル、あんた何いつて少しば英語でやつになつたの？」

「あ……まあ日常会話ぐらいなら差し支えなく喋れるだ

「ふうん、じゃあ今いじで話して見なさい」

「こじでか？」

「やうー早くしなさいーーー！」

あたしはこいつとりが何年もしていないうな錯覚に陥つた。

変ね……まだキョンは留学して1ヶ月も経つていないので。。。

あたしは頭の中をひっかけまわして考へてゐるキョンを見つめながらそんなことを考へていた。

「よし、聞ひなれ」

キョンはやつぱりなり、片膝をついてしゃがむとあたしの左手をとつた。

I thought that it mattered whether I said or where I said it.  
Then I realized the only thing that matters is that you, that you make me happier than I ever thought I could be and if you let me I will spend the rest of my life trying to make you feel the same way.

そう言って優しく手の甲にキスをしたかと思うと……。

Haruhi, will you marry me?

「これ……」

あたしの薬指にはきれいなエンゲージリングが光輝いていた。

「英国の紳士はな、プロポーズの時片ひざをついて、"Will you marry me?"と聞くらしい顔を真っ赤にしながらキヨンはそう言った。

「それで……返事は……？」

あたしは真っ赤にななりながらキヨンを近くまで呼び寄せた。

キスをした。

「 もううん……良いくに決まつたるじやないのー。」  
あたしが一番勇気を出した瞬間だと思つた。  
その時のキヨンの顔は生涯忘れないことはないだろ？。

キヨン……。

今度、向こうへ行くときは一緒に行つていいよね？  
その時はしつかり抱きしめてなれこよへ。

……なんてね！

わへ、離れないわよー！

キヨン！大好き！！

終わり

## 最終話 キヨン（後書き）

ええ、いかがでしたでしょうか「ブラジル・シンンドローム」？この作品なんですが、実はある曲をモチーフにした曲うひと呼ばれるものなんですね。

その曲とは、お氣づきの方もいらっしゃるとは思いますが…

『メルト』

と呼ばれるボカロの曲です。

歌詞

朝日が覚めて

真っ先に思い浮かぶ

君の事

思い切つて前髪を切つた

「どうしたの？」って聞かれたくて  
ピンクのスカート お花の髪飾り  
さして 出かけるの

今日の私は かわいいのよ！

メルト 溶けてしまいそう

好きだなんて 絶対にいえない  
だけど

メルト 目も合わせられない

恋に恋なんてしないわ

わたし だつて君の事が・・・好きなの

天気予報がウソをついた

土砂降りの雨が降る

カバンに入れたままの

オリタタミ傘 うれしくない

ためいきをついた

そんなとき

「しようがないから入ってやる」なんて

隣にいる きみが笑う

恋に落ちる音がした

メルト 息がつまりそう

君に触れてる右手が

震える 高鳴る胸

はんぶんこの傘

手を伸ばせば届く距離

どうしよう・・・！

想いよ届け 君に

お願い 時間をとめて

泣きそうなの

でも嬉しくて

死んでしまうわ！

メルト 駅についてしまう・・・

もう会えない 近くて

遠いよ だから

メルト 手をつないで

歩きたい！

もうバイバイしなくちゃいけないの？

いもうすぐ わたしを

抱きしめて！

・・・なんてね

良ければ、一回動かしてYouTubeで『メルト』と検索していただければ、出るかと思います^ ^

こんなかわいい歌詞をこんな風に書いてしまったんです。

これには理由がありまして、SSS仲間とメルトを使った曲SSSを書こうとなつた時に、くにぞおさんとお話をしていて「この曲で悲しいのは書けないかな?」と言われたので、とりあえずプロットを思いつくまま作成し、挑戦してみました。

タイトルの「ブラジル・シンドローム」ですが、もし日本で原発事故が起っこつたら、核の暴走による超加熱<sup>メルト・ダウン</sup>でブラジルまで穴があくつとう[冗談（地球の構造上ありえないですので）から来たものです。

mixi投稿時には、エンディングや場面ごとに解釈が人によっては違い、謎が多い作品になつてしまい、作者なりの解釈はあるのですが、明かさない方が面白い!と思うので、よければ自分なりの解釈をしていただけると幸いです^ ^

ちなみに、キヨンがハルヒへのプロポーズで使つた言葉の意味ですが、

「何を言つが、どこで言つがが大事だと思つてた。でも唯一の大事なものは君だと気づいたんだ。君といると最高に幸せになれるし、もし可能なら僕の人生をかけて君を同じように最高に幸せにしたい。ハルヒ、結婚してください。」

これはフレンズ?という作品から拝借したものです。

男の人が片ひざついて、"Will you marry me?"と言つのはデフォらしいです^ ^

それでは、お後が宜しいようなのでこいつで。ありがとうございました!

## 追記

執筆仲間である、UBOBさんがこの話を下敷きにした【ブラジル  
よりの帰還】を投稿されましたので、合わせてご覧下さい。  
<http://ncode.syosetu.com/n7071j/>

お気入りユーザーにも登録をせめてもらっています^ ^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6697j/>

ブラジル・シンドローム

2010年10月9日16時19分発行